

公開研究会・質疑応答要旨

質問内容 1：当時の天皇は天上人のような存在だったとよく言われますが、大正天皇は健康面に不安を抱えていたと言われていて、天皇の言葉よりもそれが影響して、樋口琢堂が福祉活動を志したと考えられませんか。（文化時報・山根氏）

回答 1：樋口の回想通りであり、大正天皇が皇太子の時代、明治 31 年に頭を撫でてもらったことのインパクトが、樋口にとって強かったと考えるべきだと思います。（藤田先生）

質問内容 2：明治末期から大正にかけての時期、なぜ仏教教団が社会活動に目覚めたのか、ただ単に近代の天皇中心主義国家の動向に遅れまいとして、いろいろと活動をしたという一般論で解決できないと思います。

当時のロシア革命（1917～1918）の影響は考えねばならず、革命の起きた世界的動向の中、曹洞宗の場合、内山愚童が関与したとされる大逆事件に対する一種の反動があって、他教団よりもむしろ積極的に反共産主義・反社会主義を実践しなければならなかった事情に注目すべきでしょう。

単なる日本の仏教教団の動向だけではなくて、世界的展開の中、このロシア革命に対する一つの危機意識が、当時の社会活動の展開の中に影を落としていたのではないのでしょうか。（曹洞宗総合研究センター・工藤師）

回答 2：仏教社会事業自体は明治期から様々な形で展開していて、契機としては、やはりキリスト教の影響が非常に強いと思います。

明治の中頃、キリスト教が日本に浸透し、その浸透する形が様々な社会事業展開しながら進んでいきますので、それに対して仏教教団としてどうしていくかということになります。

明治期の社会事業が展開していく中で様々な形を取るわけですが、明治期末から大正期にかけての現れ方というのがあります。仏教護国団のように、非常にナショナリズムの性格が強いものがそれに当たります。

もちろん、その当時の世界情勢で言えば、社会主義・共産主義が入ってきますので、それに対して仏教教団がどう対処したかというのは、当然視野に入っています。

何よりも第一次大戦の結果として、成金の出てくるような好景気があって、その後、大恐慌になって社会不安が高まり、社会事業が必要になったからこそ、樋口琢堂は少年法による事業を展開したわけです。

この時期の社会事業全般にそういう性格がありますので、当然、世界情勢から影響を受けていると思います。(藤田先生)

大内青巒の場合、曹洞扶宗会で活動中から教育事業・慈善事業に関しては非常に熱心で、宗門徒弟だけでなく、一般の生徒も入学できる学校を創設しますが、それは長続きしませんでした。

しかし、大内はずっと教育の大切さ、特に明治時代に入って生まれた世代、大内の言葉を借りれば明治第二世代への教育の大切さを、大正7年に亡くなるまで言い続けていきます。

あくまでも現時点での仮説ですが、世界情勢云々よりも、彼は江戸時代の頃の日本人の考え方、あるいはその頃の日本人の道德観に戻そうとしていたのではないか、との説を立ててはいます。

世界情勢を全く無視していたと到底思えませんが、大内は「昔(江戸時代・近世)に還りたい」「昔の価値観に戻りたい」というような考え方を持っていたのではないのでしょうか。

ただし、これを証明するには、曹洞宗の近代通史のようなものを作成した上で、再度大内青巒の歴史上の位置づけ、及び人間像を見つめ直す作業をしなければいけないと思います。(宮地)